初めてのデート

村上暁　スタッフ

１９９０年春、北陸の大学に入学し、一人暮らしを始めた僕は、固い決心をしていた。

「女の子とお付き合いするんだ！」

高校は男女共学だったけど、女の子と話をしたことがなかった。オシャレに無縁、趣味はテレビゲームと麻雀、スポーツは苦手、モテるわけないですわな。

新しく住み始めた北陸の街では、高校までの僕を知る人はいない。髪形や服に気を配って、オシャレで明るい男子学生になろう。そうすれば、女の子とのお付き合いくらい、すぐにできるだろうなんて、甘いことを考えていた。

そんな僕の前に、ステキな女の子が。同じ新入生、同じ学部、同じ年齢。銀河鉄道９９９に出てくるメーテルのような、細面、切れ長な目、すらりとしてお上品、優しくおとなしい女の子。大好きだ！

というわけで、お付き合いする相手は(勝手に)決定したけど、どうやってお付き合いすればいいのかわからない。モテない男のひがみで、これまで恋愛ものというジャンルには一切目をふさぎ耳を閉じてきたから。友達に相談したところ、「とりあえずデートに誘ったら」とのこと。しかし、その誘うというのが非常に勇気がいる。「まだ知り合ったばかりなのに、デートに誘ってくるなんて。ガツガツして気持ち悪い！」なんて思われたらどうしよう…。

僕はそのころあんまり映画は見なかったけど、なぜか大学の映画研究会に入っていた。研究会の先輩が企画する上映会のチケットを買わされた。これはちょうどいい。「先輩に無理に買わされちゃってさー。見に行かないといけないから、一緒に来てくんない？」などと、しょうがなく映画を見に行くようなふりをして声をかけた。答えは「いいわよ」。天にも昇る気持ちだった。

映画のタイトルは、『夢見るように眠りたい』。林海象監督１９８６年の作品。

映画の内容は全く知らず、どんな服を着ていこうかな、なんてことばかり考えながら、上映会の日を迎えた。

場所は、確か１０９シネマ、デパートの４階だったと思う。映画研究会の先輩がチケットのモギリをしていて、「あら、この新入生、女連れで来たわ」というような顔で出迎えてくれた。恥ずかしいような、誇らしいような気持ち。

さて、映画が始まってビックリ。画面はテレビサイズ、白

黒、しかもサイレント？！これはとんでもなく古い映画なのか？デートで見に来るのにはふさわしくないのではないか？などと焦る。彼女は退屈していないか？とそっと横顔をうかがう。じっとスクリーンを見つめる目、長いまつげ、高い鼻、う、美しい！

内容は、佐野史郎扮する探偵の元へ、誘拐事件の解決依頼が持ち込まれるという話。完全なサイレントではなく、絶妙なタイミングで効果音や音楽が流れる。

僕はすぐに映画に引き込まれた。昭和初期の東京が舞台。どこか懐かしい風景。アコーディオンや木琴の素朴な音楽。探偵コンビのコミカルな活躍。ヒロインの美しさ。そして、何より映画（というか活動写真）を愛する人々の一途な思い。

あまりにも美しく、悲しく、優しいラストに、僕は泣いた。終演後明るくなってからも、映画の場面を思い出すたびに涙が浮かんできた。

その後、二人で食事に行った。彼女は面白い映画だったと言ってくれたが、それ以外に何を話したのかあまり覚えていない。映画の世界からなかなか抜け出せずに涙ぐんでる男を前に、彼女はさぞや困惑しただろう。

残念ながら、この恋愛は成就しなかった。それでも、初めてのデートで『夢見るように眠りたい』という映画を見ることができたのは、とても幸せだったと思う。今でもＤＶＤでこの映画を見るたびに、当時のことがよみがえってくる。